

学部

	コース名	科目名	教員	時限	学びの内容
1	聖書	キリストと世界Ⅲ：新約	伊藤	木曜 1・2 時限目	神が天と地とそのうちのすべてのものを創造した当初、すべては「良かった」が、アダムとエバが神の戒めに逆らってエデンの園から追放された際に、被造世界全体が墮落した。キリストが十字架にかかってくださったのは、私たち罪人を罪から救い出すためだけではなく、墮落した被造世界を贖い出すためでもあった。キリストは私たち罪人の救い主であるだけではなく、私たちが生かされている被造世界を造り、今も生きてお働きになり、ご支配してくださっている方であり、墮落した被造世界を回復なさる方でもある。私たちは新約聖書を読んで学ぶことで、父なる神と御子なるキリストと聖霊なる神という三位一体の神や私たちがキリストにあって与えられている救いだけではなく、私たちが生かされている被造世界をよりよく知って理解することができる。本科目では、「そもそも新約聖書とはどのような書物なのか？」から始めてヨハネの福音書がどのような福音書が触れた上で、正義、愛、霊性、美、自由、真理、権力という七つの事柄をヨハネの福音書を中心にして見て行く。
2	聖書言語 (ヘブライ語)	ヘブライ語Ⅲ	菊池	火曜・金曜 2 時限目	Shalom ! ヘブライ語Ⅲでは、谷川政美「聖書ヘブライ語」の残りの部分を可能な限り扱います。本教科書は冒頭からかなり詳細な文法の扱いがあって、例文も平易ではありません。しかし、従来の翻訳ものの文法書にはない丁寧な説明と全般的な網羅があって良き作りにはなっています。最初から日本語で書かれた書としての分かりやすさも当然あります。これにしっかりと取り組み、各課ごとのテーマをとらえていくなれば、特に後半の各課は原典講読・釈義への道筋として有意義です。 各課のテーマは、前課までの習熟を前提に提示されていくものです。絶えず復習と反復に努め、仲間と励まし合ってください。また、本学では昨年度より T.A.(Teaching Assistant)制度を導入し、本講座（ⅠⅡⅢ）ともに大学院生が適宜グループの学び会を開催しています。是非積極的に参加しヘブライ語初級文法の習得を目指してください。クラスでは並行して、基本的な単語の習得を目指します。また、ヘブライ語辞典 (Lexicon)や BHS の使い方を紹介します。また実際の平易なテキスト（散文）にも慣れていくことを心がけます。
3	聖書言語 (ギリシア語)	ギリシア語Ⅲ	須藤	火曜・金曜 2 時限目	「ギリシア語Ⅲ」は、春学期・秋学期・冬学期を通して学ぶギリシア語文法コースの第三部です。新約聖書を深く理解するためには原典で読解できることが望まれます。新約聖書は、ヘレニズム期に古典ギリシア語が広くヘレニズム世界で使われるようになったコイナー・ギリシア語で書かれています。したがって、新約聖書を原典で読解できるようになるためには、コイナー・ギリシア語の文法的知識が欠かせません。本授業では、ジェレミー・ダフ著『エレメンツ・新約聖書ギリシア語教本』を用いて、13章から20

					章までの範囲を学びます。具体的には、毎回授業の初めにギリシア語単語の小テストを行って単語力の強化を図ると共に、毎回出される課題と期末まとめ課題に取り組むことで文法知識の定着を目指します。本コースのねらいは、新約聖書をギリシア語原典で読むことを前提にした、コイナー・ギリシア語文法の獲得であります。同時に、新約聖書のギリシア語テキストに徐々に馴染んでいくことでもあります。
4	神学	キリスト教史 II	須藤	木曜 3・4 時限目	「キリスト教史 II」は、初代教会から宗教改革の夜明けまでのキリスト教の歴史を扱います。初代教会にさかのぼってキリスト教の歴史を学ぶことは、キリスト者としてのアイデンティティーを深めていく上でも欠かせません。本授業では、キリスト教の歴史的な起源にさかのぼって、そこからキリスト教の発展をたどります。具体的には、宗教改革直前までを、古代教会・帝国の教会・中世の教会・宗教改革の夜明けという五つの時代に分け、それぞれの時代における重要なキリスト教の人物や出来事を解説します。本科目のねらいは、キリスト教の歴史をその起源から学ぶことを通して、キリスト教とは何か、という問いに対して、自分なりの回答を見だし、キリスト者としてのアイデンティティーを深め、それによって、自分に与えられたヴィジョンに希望をもつことができるようになることです。くわえて、キリスト教教義へ探求的にアプローチするための基礎能力の習得が見込まれます。
5	(同上)	日本キリスト教史	山口 (陽)	水曜 5・6 時限目	キリシタン史を前史として明治期以降のプロテスタント史を中心に概観します。景教伝来の可能性や明治以降のカトリック、ハリストス正教会にも目を配り講義を行います。キリシタン史は日本の宗教政策や日本人性を理解するためにも重要であるのでしっかりと扱います。これは近代のプロテスタント史を理解する上でも不可欠です。プロテスタント史においては、近現代のキリスト教史における「教会と国家」の課題を日本における特殊性をふまえて考察し、今日的課題をも探ります。キリスト教と文化・社会との係わり、具体的には聖書翻訳や讃美歌、文学、戦争、社会事業などにも言及しますが、主には日本における宣教や教会形成について扱います。日本のキリスト教史全体をとらえることをめざしますが、特に東京基督教大学と関係の深い福音派教会の特質についての理解を深めることを意識します。専門用語が多く、史料紹介も行なうため、日本語および日本史の知識が前提として必要とされます。
6	ユース ミニストリー	思春期の文化と伝道	岡村	金曜 3・4 時限目	同年代のユース同士の関係性が、思春期において非常に重要な役割を果たす事は、社会学や心理学分野の研究を通して周知の事実となっているが、多くの場合社会は、その関係性をネガティブなものとする傾向がある事を否めない。アルコールアブュース、校内暴力問題、不純異性交遊、ゲーム依存といった問題は、思春期文化の悪影響であると考えられてしまうようである。しかし近年多くの研究者による、同年代の若者同士の関係性や思春期文化がユースに与えるポジティブな影響についての言及が増加しつつある。このクラスでは、ユースの精神的成長、社会的成長、そして霊的成長に焦点を当てつつ、教会やその他のクリスチャングループがユースに対してどのようなアプローチをす

					るべきかを考える。このクラスではさらに、インタビューを中心としたユースに対する質的研究を通して、実際にユースから学ぶ。ユースとのラポール形成を目指し、将来のユースミニストリーへ備える取り組みを行う。
7	教会と社会	女性と社会	岩田	水曜 3・4 時限目	講義では、まず、自分たちにとって身近なライフプランを見つめなおすことにより、女性を取り巻く現代の状況への理解を深める。その後、女性を取り巻く状況のこれまでの歴史を振り返る作業として、フェミニズム運動の発祥の地としてのヨーロッパ、その影響を受けたアメリカや日本の女性たちの歴史を学ぶ。その中でも特に、キリスト教とのかかわりの深い女性たちによる活動に光を当てる。最後に、国立研究所の前身である国立女子神学校にスポットをあて、アメリカ人女性宣教師や日本人女子学生など、当時の国立女子神学校を取り巻く女性たちの社会的背景をたどる中で、日本の初期女子教育、キリスト教伝道の背後にあった歴史の中の神の摂理に触れたい。 学生によるインタビュー、ニュース企画、プレゼンテーション等からも多くを学ぶことが期待される。 本授業を通して、社会の中での女性の役割や女性の生き方を多角的に学ぶことにより、女子学生、男子学生の両方にとって、今後の家庭・教会・社会の中での歩みがより実り豊かなものとなることを願う。
8	(同上)	心理学Ⅱ	岡村/ 徐	木曜 1・2 時限目	このクラスでは、キリスト教の世界観、特に福音的な聖書観に立脚しつつ、神の創造された人間の心について共に学びます。心理学Ⅰでは、心理学の全体像を概観しつつ、主に発達心理学を学びの中心としました。心理学Ⅱでは、臨床心理学を中心に学びます。臨床心理学は、精神障害や心理的な問題、不適応行動などの援助や回復、予防またはその研究を目的とする心理学のひとつの分野です。単にここに問題を抱える人に働きかけるだけでなく、精神的健康を保持、増進、または教育するといった予防も目的のひとつとなっています。臨床的な心のケアを考える上で、避けられるべきことは、私たちが勝手に、自分の尺度で、他者の心の動きを「健康だ」「不健康だ」と決めつけることです。良くないと感じてしまう他者の「問題行動」でさえも、その人にとってみれば、重要な意味を持つことも少なくありません。大切なのは、考え方や行動を「とにかくやめさせる」ことではなく、その意味をしっかりと理解した上で、対処の方法を考えることです。このクラスでは、心理学Ⅰに引き続き、堀越勝著の「感情のみかた」を読みつつ、特に重要他者とのコミュニケーション力をつけていきます。

大学院

	コース名	科目名	教員	時限	学びの内容
Ⅰ	聖書学	パウロ書簡	伊藤	水曜 3・4 時限目	本科目は、パウロがピリピ教会に書き送った手紙をひとつの例として取り扱って、他のパウロ書簡を読み解く糸口とする。身柄を拘束されて裁判を受けているパウロがピリピの教会に宛てて書き送った手紙がピリピ人への手紙である。パウロとピリピの教会との関係は非常に良好で、本書簡を「家族の手紙」または「友情

					の手紙」として読み解くことが一般的である。ところが、ポール・ホロウェイは、ピリピ人への手紙を「慰めの手紙」として読むことを博士論文で提唱して、昨今注解書を仕上げて、出版されるようになった。ここでいう「慰めの手紙」とは、同情したり、哀悼の意を表したりすることではなく、哲学的な課題として、この世の問題や苦難とどう向き合うかという意味での「慰め」である。ピリピ人への手紙を「家族の手紙」または「友情の手紙」として読むのと、「慰めの手紙」として読むのでは、釈義・解釈は大きく異なってくる。ピリピ人への手紙を「慰めの手紙」として読むということは、ギリシア・ローマの哲学の文化脈でピリピ人への手紙を読むことになる。
2	実践神学	キリスト教と心理	岡村	火曜 1・2 時限目	本科目は、宗教的回心や献身といった宗教と人間の関係性の変化に関わる現象に着目し、そのプロセスや心理メカニズムの理解を目指します。ジェームス・ファウラー（Emory University）の心理的発達理論を応用した「信仰発達論」から、宗教心の発達の基本概念を学び、続けて、ジョン・ロフランド（University of California, Davis）等の研究を通し、宗教的回心の類別や、それらの社会的・文化的・心理的背景との関連における宗教心の発達について考察します。また後半は、現代日本の教会が直面する心理的課題や問題について話し合います。まず、クリスチャン・リーダーとして持つべき「心の健全さ」とは、どのような状態を指すのかについて、個人差も十分に考慮しつつ考えます。その上で、今日的課題である、うつ、発達障害、アダルトチルドレン、高齢者の心理的課題、死の準備と看取りといったトピックを取り上げ、教会の対応について共に考えます。授業形態は、講義と演習を併用します。
3	歴史神学	キリスト教の教理形成の歴史	齋藤	火曜 3・4 時限目	本コースは、現在のキリスト教の主要な教理体系が、歴史的にどのような変遷をたどりながら形成されてきたのかを学ぶことを主な内容とします。すなわち本コースは、伝統的にはいわゆる「教理史」として扱われてきた内容です。それは単に歴史的観点から扱うのではなく、キリスト教史もしくは教会史と組織神学（教義学）の間に位置する学際的な分野としての位置付けを持っています。本来、教理史の内容はまことに膨大なものですが、十週の限られたスケジュールですので、通史として全体を扱うことはせず、プロテスタントの組織神学の観点から重要と思われる教理に焦点を絞りながら、それらが形成されてきた歴史の背景や、そこで交わされた議論を探り、神学的な論点がどこにあるのかを確認しつつ、その上で実践的かつ今日的な意義を学ぶことを目指します。また、授業の準備にあたっては、毎回、関連する一次資料を読んでいただきます。一次資料を神学的・歴史的に読み解き、分析する力を養うこともまた本コースのねらいです。
4	宣教学	現代における宣教と教会	篠原	金曜 1・2 時限目	宣教と教会は聖書全体を貫くテーマです。本科目では、「神の宣教」（missio Dei）と「神の宣教の民」という観点から聖書全体を読み解き、その理解を土台としつつ、現代における宣教と教会の在り方について考察していきます。教会にとって宣教は最も身近な概念の一つですが、宣教を定義することは容易なことではありません。その理解は一樣ではなく、今も論争の火種となり続けています。20 世紀の宣教思想史はまさに宣教を定義し、さらに定義し直すことの積み重ねであったともいえます。本科目では、20 世紀の宣教思想史において出現した様々な宣教理解の所産を手掛かりとしながら宣教と教会について考察していきます。

				また、本科目において、信徒の神学について考察していきます。信徒の神学は、「信徒とは何か」を神学的に問うことであり、いくなれば信徒のアイデンティティと信徒の召しを問い直すことだといえます。加えて、本科目では日本文化とキリスト教をテーマとして取り上げ、日本の文化と社会における宣教的な課題について共に考えていきます。
--	--	--	--	---